



平成24年度 発掘調査報告

[2010年5月21日]

平成24年度の発掘調査について

平成24年度に行われている、発掘調査について随時報告していきます。

2月27日（水曜日）更新 朴ノ木遺跡の調査について

調査研究課の本田です。

朴ノ木遺跡の調査について報告します。朴ノ木遺跡は豊田市下山代町内にあり、本年度の調査区は旧耕作地に面した緩斜面部および柿根田遺跡と隣接する斜面部になります。



朴ノ木遺跡から北西を望む



朴ノ木遺跡の調査区全景です。左側の細長い部分をA区、右の四角形の部分をB区として掘削しました。

調査区の北側の緩斜面を中心としてA区、南側の平坦部および斜面部をB区として、黒色土の上面と下面の調査をしてきました。調査は9月から2月までとなります。

今回の調査では遺物はほとんど見つからず、表面で採取したものも含めても15点ほどでした。

A区では、黒色土の上面では土坑に見える遺構は多数あったものの、はっきりと人の手によると思われるものは多くありませんでした。その中で、時期や性格は不明ですが、**石が詰まった土坑**を1基確認しています。



石が詰まった土坑

これらの石の配置には規則性がなく、何らかの理由で投げ込まれたか、積んであったものが崩れたのではないかと考えられます。

一方黒色土の下からは、**焼けた土や炭化物を含み、壁面や底部が焼けている土坑**を確認しました。



焼けた底面の下の堆積を確認するため、底の一部を下まで掘り込んでいます。

同じサイズ、形で、焼けた土などを含んだ土坑はあと2基見つかりましたが、壁面や底部が焼けていたものはこれだけです。可能性としては**炉跡**が考えられますが、周囲に建物の跡は見つからず、はっきりとはしません。やはり遺物を伴わず、時期特定はできませんが**縄文時代**のものである可能性があります。

B区では斜面間の谷状になった地形を中心に**陥し穴**とみられる土坑を4基確認しました。**陥し穴**の特徴として、杭などを設置した跡が底部に残ることがあります。**朴ノ木遺跡の陥し穴**は、中央に杭を設置した跡が1つ残るものが2基、いくつかの細い杭を設置した跡が残るものが1基、そういった跡がみられないものが1基とバリエーションに富んでいます。



杭を設置した跡を確認するため、陥し穴を半分に分った（断ち割りといいます）状態の写真です。

前述したA区の土坑と組み合わせると、**縄文時代**にはこの**朴ノ木遺跡**は狩猟の場として、短期的な滞在場所となっていたようにも想像できます。しかし、残念ながら遺物が乏しく、それぞれの遺構の時期が特定できませんので、遺跡の具体的な性格は今のところ判明しておりません。

今でも、朝調査を始める際に、前夜にシカやイノシシの歩いたあとが認められますし、泥地でイノシシが暴れたあとが見られます。少なくとも**朴ノ木遺跡**の範囲で昔の人がシカやイノシシの狩りをしていたことは間違いありません。他の遺跡の調査成果などと合わせてこの地域の生活像を明らかにしていきたいところです。

1月28日（月曜日）更新 柿根田遺跡の調査について

調査研究課の米満です。

柿根田遺跡の調査報告の続報です。**柿根田遺跡**はA～D区に分割して調査を行いました。C区に隣接するD区の調査が12月に終了しましたので、調査結果をお知らせします。

D区の調査は、川の水をせき止めるために造られた、**堰**（せき）の調査が主になりました。C区、D区には合わせて4本の川の跡が見つかり、それらの川が一本に合流しているD区で、板材の**矢板**と横木を組み合わせで造られた**堰**が発見されました。（写真1）



写真1

堰はかなり複雑な構造になっており、長さ約1メートル前後の**矢板**と、長さ約2メートル前後の横木が交互に組み込んでいます。横木には長いものでは、長さが6メートル以上もある板もありました。(写真2) 川幅の西1/3くらいから**矢板**と横木が出土しておらず、**堰**が水をせき止めた後、この**堰**がどのように使われたのかは不明です。川の跡から、**古代の灰釉陶器**、**中世の山茶碗**が出土していますが、**堰**に堆積した土壌からは、**中世の山茶碗**の破片が出土しており、**堰**が築かれたのは**中世以降**と考えられます。



写真2

さらに調査を進めて**矢板**と横木を取り除くと、その下から加工された板材と、自然木の横木でできた別の**堰**が出土しました。**堰**の構造は単純で、長さ約1～2メートルの板材と、枝がついた自然木を横木として川をせき止める形で造られています。横木と組み合わせる**矢板**は出土しませんでした。(写真3) この出土によって、一度**堰**を作った後、新たに作り直されたことが分かります。



写真3

柿根田遺跡の本年度の調査は終了しました。今 [\(about:blank\)](#) までの調査結果を検討して、何か新しいことがわかれば、また報告したいと思います。

1月21日（月曜日）更新 皿田遺跡の調査について

調査研究課の小澤です。

皿田遺跡の調査報告です。皿田遺跡はA区とB区に分割され、A区は8月下旬から10月初旬、B区は10月中旬から12月初旬にかけて調査が行われました。B区の調査終了をもって今年度の皿田遺跡の調査は終了しました（写真1）。今回はB区の調査の続報を中心に紹介します。

皿田遺跡B区では、住居跡や炉跡、柱穴などの遺構は見つかりませんでした。炭焼窯が伏焼タイプを中心に20基見つかりました。遺物としては、縄文土器の破片が数片ほぼ同じ窪み（O21SK）から見つかりました。時代は縄文中期（紀元前3000年頃）とみられています（写真2）。他には前回紹介した剥片石器が見つかりました。

遺物の出土状況は、主にA区では中世の遺物、B区では縄文時代の遺物が出土しました。このようなことから縄文時代や中世には人々の活動が調査区周辺であったことがうかがえます。逆に言えばこれらの一時期を除いて人々の活動がここでは希薄になっているとも言えます。何らかの制約があったのかもしれません。今回の発掘調査中に皿田遺跡では数回にわたって降雪がありましたが、皿田遺跡よりも標高の低いところでは降雪がなかった場所もありました。自然環境面から考えてみると標高500mを超えるような地域では、50～100mの標高の違いが植生や動物に影響を与え、人々の活動にも影響を及ぼしているのかもしれない。



写真1 全景写真



写真2 縄文土器

また、高校生の体験学習（写真3）を兼ねて炭焼窯（O14SY）を精査しました。この炭焼窯の窯壁については、前回の報告で「粘土ブロックを3～4段に積み上げて窯壁を構築したように見られます。」と記載しましたが、その後の観察で窯壁が少なくとも2時期にわたって構築されていた可能性が高くなりました。そこで、窯壁表面の粘土ブロックを取り除き初期の窯壁を検出する作業を行いました（写真4）。その結果、粘土ブロックの裏面には黒く焼かれた壁面が出てきました。粘土が22～23cmほど厚みで窯壁を取り巻いていたことがわかりました。さらに、床を溝状に掘削したところ、粘土がしかれていたことがわかりました。A区では地山（岩盤）を掘り込んで平坦に整形して床が作られていましたが、ここでは地山（岩盤）は整形されずに粘土を貼ることで平坦面を構成していたと考えられます。炭焼窯は地形などの条件によって様々な形態があるようです。もしかしたら制作者の個性もその要因のひとつかもしれません。



写真3 高校生体験学習



写真4 炭焼窯掘削状況（右：窯壁除去前 中：窯壁除去状況 左：窯壁除去後）

1月10日（木曜日）更新 コヤバ遺跡の調査について

調査研究課の伊奈です。

あけましておめでとうございます。今年も当Webの更新に努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

11月末から行われた**コヤバ遺跡**の調査が12月末に終了しました。調査結果をお知らせします。

コヤバ遺跡は豊田市下山代町に所在し、**鶴ヶ池遺跡**の北西方向に位置しています。北から南へ向かう谷と尾根のすそ部分が調査区です。試掘では戦国期と考えられる遺物が見つかっていました。今回の調査では、谷部分で壁面が被熱して赤くなり炭化物の詰まった土坑（煙道を持たない**伏焼**（ふせやき）と呼ばれる炭焼窯と思われる）3基、尾根の斜面で**炭焼窯**2基を検出しました。遺物の出土は少なく、戦国期と考えられる陶器片と近世の陶磁器片が同じ層から出土しています。谷部分からの出土なので、おそらく沢の上流からの流れ込みだと思われます。



▲ コヤバ遺跡の全景。 黒っぽく見える谷部分で伏焼の炭焼窯と考えられる土坑を検出し、明褐色の尾根斜面で炭焼窯を検出した。

調査は植林されていたヒノキを伐採して実施しました。検出した5基の炭焼窯（伏焼の炭焼窯と思われる土坑3基を含む）からかき出されたと推測される炭化物や焼土がこれらのヒノキの根の下にあり、窯の操業時期はヒノキの樹齢よりも前ということになります。ヒノキの樹齢は70年程でしたので、これらの窯はいずれも昭和初期以前の窯だということがわかります。伏焼の炭焼窯と思われる土坑（004SK）の埋土からは明治初期の陶磁器が出土したので、004SKはおそらく近代以降のものだと推測できます。炭焼窯2基の内、大型の窯（001SY）の灰原（かき出された炭化物や焼土の層）の下（おそらく窯を作った時に出土した土）からは、近世（江戸時代）末の陶磁器片が出土しており、001SYは近世（江戸時代）末以降のものだとわかりました。またもう1基の小型の窯（002SY）は001SYよりも古い層に作られており、近世（江戸時代）に操業していた窯だと考えられます。下山地区における今年度の調査では多くの炭焼窯が見つっていますが、いずれも遺物を伴っておらず時期が不明でしたので、コヤバ遺跡で検出されたこれらの炭焼窯は操業時期が推測できる貴重な遺構となりました。



▲ 004SKの掘削の様子。土坑中の左端に明治時代の陶磁器が見える。



▲ 001SYの掘削の様子（窯の半分を掘削）



▲ 001SYの完掘状況。煙道は石を組んで作られている。

尾根のすそ部分にある002SYは、底面に平らな石が複数敷かれていました。石を外してみると、石の下にも炭化物や被熱痕が見られるので、窯は少なくとも2度以上使われ、改造された可能性が考えられます。石敷きは何のためにされたのでしょうか？湿気を逃がすためか、空気の通りを良くして燃焼効率を良くするためか、今のところ不明です。また、この窯の焚口（たきぐち）の前は平場になっており、焚口（たきぐち）と並行するように4つの平らな石が均等に敷かれていました。地元の方の話（戦前から戦後にかけての炭焼窯）では、窯は屋根で覆（おお）われていて、窯の前には作業場があったとのことですので、これらの石は屋根か庇（ひさし）を支える柱の礎石（そせき）で、平場は作業場だったのかもしれません。今後、これらの事を検証していきたいと考えています。



▲ 002SY（焚口（たきぐち）方向から撮影）



▲ 002SYを煙道の上方から撮影。焚口(たきぐち)に並行して平らな石が敷かれている。(写真上方)



▲ 底面に敷かれていた石を外す。(石の下にも炭化物や被熱痕が確認できた)

最後に、コヤバ遺跡の「コヤバ」という字(あざ)名について。明治17年作成の地籍図を見てみると、字名はカタカナではなく「小屋場」となっていました。屋根のついた炭焼窯と作業場は「小屋」を連想させますが、どうでしょうか？

※遺構の記号について

私たち調査員は遺構を記号で表記することが多いです。本文中でも記号を使っています。今回の報告で使用した記号について説明しておきます。

001SY

「001」はこの遺跡の中で1番目に記録された遺構であることを表しています。「SY」は窯を意味します。002SYであれば、2番目に記録された遺構である窯ということです。

004SK

「004」はこの遺跡の中で4番目に記録された遺構であることを表しています。「SK」は土坑を表します。ですから、この遺跡の中で4番目に記録された遺構である土坑という意味になります。

1月4日(金曜日)更新 鶴ヶ池遺跡の調査について

新年、あけましておめでとうございます。

調査研究課の奥野です。